
普通で普通じゃない日常

紀葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通で普通じゃない日常

【Nコード】

N6514V

【作者名】

紀葉

【あらすじ】

普通だけど普通じゃない奴らの日常です。
暇だったら読んでください。

登場人物紹介（前書き）

木「出てくる人を紹介するお！」

登場人物紹介

八木 紀葉 （やつぎ きよう）

中学3年生。本編の主人公。女。

わりとクールだが、優しい性格。

何故か女にもてる。超もてまくる。でも本人はいたってノーマル。オタク。ゲームが大好き。アニメや漫画も好き。

ついでにいうと、ニコニコ動画も好き。

男女の恋愛が好物。でも自分は恋愛に疎い。

ファッションにも疎い。休みの日はいつもジャージ。

なんというか、あまり女の子らしくない女の子。

八木 千樹 （やつぎ せんじゅ）

高校2年生。紀葉の兄。男。

まじめな性格だが、それゆえに苦勞が多い。苦勞人。あとへたれ。

紀葉にほとんど女しか寄ってこないのがかなり嫌なんだとか。

紀葉にはノーマルでいてほしいがゆえに、紀葉に手を出そうとする女、また、自分がダメ人間だとみなした男には、かなり厳しいし、冷たくあたる。

それがたたってか、シスコンだと思われる。

恋人の栞のことは大好きだが、へたれなので、手をつなぐのがやっ
と。

最近胃が痛いらしい。頑張れ。

松田 栞 （まつだ もみじ）

高校3年生。千樹の恋人。女。

マイペースな性格で、結構物事に楽観的である。お姉さんタイプ。千樹のことが大好きで、見つけるとすぐ抱きついたりする。

紀葉のことも可愛がっている。そりゃもう実の妹のように。

実の弟の杉助とも普通に仲良し。

美人でスタイルも良いので、結構異性にもてる。
でも本命は千樹だけ。一途。

千樹のことを信じているので、嫉妬とかはしない。

松田 杉助 (まつだ すぎすけ)

高校2年生。椀の弟で、千樹の親友。男。

陽気でわんぱくな性格。みんなのムードメーカー。
いつも笑顔を絶やさない。ポジティブ。

恥ずかしい感じのことも、普通にサラッと言っちゃう。
フレンドリーで、千樹とも紀葉ともかなり仲良し。

実の姉の椀とも普通に仲良し。

サッカー馬鹿。サッカーに命かけてる。

サッカーのゲームでも彼の右にでるものはいない。

草野 希華 (くさの きいか)

中学1年生。紀葉の後輩。女。

無邪気で少し恥ずかしがり屋な性格。

紀葉のことが好き。でも本人には友達としか思われていない。
振り向いてもらおうと頑張っても、思いは届かない。

でもめげない。頑張り屋である。

ちなみにレズじゃない。惚れたのがたまたま女だっただけ。

希菜や希音は姉妹としては普通に好き。

恋のライバルは多い。でも頑張る。

草野 希菜 (くさの きいな)

中学2年生。希華の姉で、希音の双子の姉。女。

いわゆるオナベで、性格は完全に男。女っていわれると怒る。

中身が男なので、女の人が好き。今のところ好きな人いないけど。
制服も男ものを着ている。学校に許可は取ったらしい。

真性のシスコン。希華や希音にたいしてかなり過保護。恋人も、希華や希音が本当に好きな人しか認めないとか。草野家の家事はだいたい彼：じゃなくて彼女がやっている。でも希華と希音が手伝ってくれることが多い。仲良し姉妹。

草野 希音 （くさの きいね）

中学2年生。希華の姉で、希菜の双子の妹。女。

ふだんはおとなしい性格で、あまりしゃべらない。

しかし、希華や希菜に手を出そうとする輩があらわれると、ヤンデレになりどこからか鉈を取り出しそいつを殺そうとする。

そして希華と希菜に止められる。怖いシスコン。

紀葉については、希華のほうが惚れているので、まあいいやということになっている。

料理が上手で、草野家のご飯は彼女が作っている。

希華と希菜の嬉しそうな顔を見ると心が癒やされるとか。

梅山 桜太郎 （うめやま おうたろう）

中学3年生。紀葉のクラスメート。男。

典型的なヤンキーっぽい性格で、ちょいツンデレ。

地元でそこそこの名のしれているヤンキー。

しかし紀葉に喧嘩を売って、紀葉に負けてから、あまり怖がられなくなった。

そのときから、紀葉に惚れている。

でも素直になれず、弟の銀杏以外にはあいつはライバルだと言っている。

自分で喧嘩をふっかけたりして、後で後悔する。

紀葉からは普通に友達に思われている。

梅山 銀杏 （うめやま いちよう）

中学1年生。桜太郎の弟。男。

冷静な性格。ちょっと毒舌。

桜太郎とは違い、まじめな優等生。

背が小さいので中学より下に見られる。

でもあまり気にしているようには見えない。

桜太郎が紀葉に惚れていることを知っている唯一の人。

じれったくて少しイライラしている。

でもくつついてもくつつかなくてもどっちでもいいとも思っている。

椿 百合（つばき ゆり）

中学3年生。紀葉と同学年の生徒（クラスは違う）。女。

わがままな性格。常にgoing my way。

ガチレズ。女の子大好きで野郎大っ嫌い。

いつも女子にセクハラをしている。

ゆえに女子からは変態女として恐れられている。

今のところ本命は紀葉。でも紀葉からもちょっと嫌がられている。

桜太郎とは幼なじみという名の腐れ縁。超仲悪い。

実は金持ち。メイドさんにもセクハラしている。

七葉 木（ななつは もく）

紀葉と千樹の面倒をみている人。女。

明る過ぎる性格。常にハイテンション。

紀葉たちの両親と友達で、海外に行っている間面倒をみてくれると頼まれたらしい。

かなりオタク。そしてニコ厨。

ニートではないと言っているが、何の仕事をしているかは不明。

紀葉たちのことは自分の子供のように可愛がっている。

みんなには自分のことを管理人と呼ばせている。

ちなみに作者の代弁者でもある。

登場人物紹介（後書き）

紀葉「こんな紹介で大丈夫か？」
木「大丈夫だ、問題ない。」

だいたいこんな感じ（前書き）

日本のある県のある市のある場所に、

1軒の民家がありました。

そこに住んでいるのは、女子中学生と、男子高校生と、よくわからない奴。

今日は休日で、何やら人が集まっているようです。

だいたいこんな感じ

「紀葉たちの家」

紀葉「…なんか今日は賑やかだな…。」

木「たしかに。いつにも増して賑やかですなあ。」

千樹「あの…栞さん、もう少し離れてくれませんか…。」
／／／

栞「えー何で？別にいいでしょ♪」

千樹「いや…あの…。」

杉助「ニヤニヤ（・▽・）」

千樹「ニヤニヤしてんじゃねえよ！」

希華「ね、ねえ紀葉さん…。」

紀葉「ん、何？」

希華「もしよかったら、今度の日曜一緒に遊びn」

桜太郎「おい紀葉！今度の日曜こそ決ちゃk」

百合「ねえ紀葉？今度の日曜私の家n」

銀杏「人の話を途中で遮るな。後半2人。」

桜太郎「お前は黙ってろ！」

百合「つーかあんたも遮ったでしょ！あたしの話！」

希華「…えっと…。」

希菜「おい、希華に譲れよ。他にも時間あるだろうが、大人気ない。」

桜太郎「それこいつにも言えるだろうが！」

希華「ひっ!?!」

希音「…。」チャキ

桜太郎「うおお!?!」

希菜「だーっ!?!待て待て希音!鉈出すな!はやまるな!」

希音「…じゃあやめる。」

希菜「ホッ…。」

桜太郎「た…助かった…。」

百合「…チツ。」

銀杏（あ、舌打ちした…。）

紀葉「：なんか相変わらずだな、あのへん。」

希華「あはは：そうだね。」

木「いつもあんな感じで大丈夫なんかな。桜太郎とか。」

紀葉「あ、なんかスマブラやりたくなったなあ。」

木「お、いいねえ。じゃあやるか♪」

千樹「おい、ゲームばっかしてないで勉k y」

柊「あ、私も一緒にやっていい？」

千樹「え、t y」

紀葉「いいですよ♪」

杉助「じゃあオレも！」

千樹「お、おi」

木「ok ok。」

希華「わたしもやりたい！」

希菜「俺もやる。」

希音「私も：。」

桜太郎「おれも混ぜろ！」

銀杏「僕もやりたいなあ。」

百合「紀葉がやるならあたしもやるわ！」

紀葉「じゃあトーナメントにしようか。」

千樹以外「おおー！」

千樹「…。」

紀葉「あ、お兄ちゃんもやる？」

千樹「いや、俺h」

木「めんどいから強制参加でよくね？」

紀葉「じゃあやろう！」

千樹「ええええええ…。」

紀葉「大乱闘のはじまりだあ！」

千樹以外「イエーイ！！」

千樹「…誰か俺の話を聞け…。」

だいたいこんな感じ（後書き）

ちなみに優勝は紀葉だったようです。

紀葉「強靱！無敵！！最きよおお！！！！」

放課後のちょっとした出来事（前書き）

中学校組がメインです。

希菜「俺と希音は出てないけどな。」

放課後のちょっとした出来事

〽学校〽

紀葉「あゝやっと終わった。」

女子生徒1「紀葉さん！お帰りになるのですか？」

紀葉「ん、今日は特に用事もないし…。」

女子生徒2「ではお氣をつけて！」

女子生徒3「さようならです！紀葉さん！」

紀葉「う、うん。」（なんかめんどくさいな…。）

桜太郎「おい紀葉。ちょっと来い。」

紀葉「んー？なn」

女子生徒1「おい貴様！」

女子生徒2「紀葉さん呼び捨てとは何事だあ！」

女子生徒3「さんをつけろよでこすけ野郎！」

桜太郎「うるせえよ！なんなんだよお前ら！」

紀葉（てか私上条さんじゃないしww）

桜太郎「はやく来い！」

紀葉「へいへい。」

（校門近く）

紀葉「で？っていう。何の用？っていう。」

桜太郎「お前ヨッシーじゃねえだろ。…まあいい。これなんだが…。」

紀葉「？なにこれ？」

桜太郎「皿だよ。とっとと受け取れ。」

紀葉「…なんでお皿？」

桜太郎「親父が皿買いすぎて、余った皿誰かにやってこいってお袋に言われた。」

紀葉「ああ、さいですか…。てかなんで私？」

桜太郎「べ、別にお前にあげたいって思ったわけじゃないからな！」

紀葉「？…まあいいや。とりあえず貰っとくよ。」

桜太郎「ああ、ありがたく思e」

百合「おおおおおたろおおおおおう！！！！！！」

ドガッ

桜太郎「ぶ!?!」

紀葉「!?!」

桜太郎「~~~~っ!何すんだゴルァ!」

百合「この野郎…。あたしの紀葉と話を弾ませやがって…。許せん!」

桜太郎「だからっていきなり跳び蹴りくらわせる奴がいるかよ!?!」

百合「ここにいるでしょう!」

桜太郎「てめえだけだ!」

ギャーギャー

紀葉（本当に仲悪いんだな…。あの2人…。）

希華「ね、ねえ紀葉さん。」

紀葉「ん? あ、希華。」

希華「よかったら、その…一緒に帰ってもいいかな…?」

紀葉「うん。ok。」

希華 「ホントに!？」

紀葉 「い、いやなんでそんな驚くのさ?別に拒む理由もないし…。」

希華 「じゃあ帰ろう♪」

紀葉 「あー…うん…。」 (桜太郎達は…ほっといていいか…。)

放課後のちょっとした出来事（後書き）

桜太郎と百合は1時間くらい喧嘩してたらしいです。

紀葉「作者は何が書きたかったんだ？」

木「シラネ。」

小話集（前書き）

木「短い話の詰め合わせだよ。」

小話集

『さすがにねーよWW』

くプールく

希菜「あのく先生？」

先生「なんだ草野。」

希菜「あの…水着も男ものでいいっすか？」

その場にいた全員（希菜以外）「!？」

女子生徒達（希菜ああ！それはダメでしょおお！）

男子生徒達（ちょWWマジっすかWWやべWW興奮してきたWW
WW）

先生「…さすがにそれは女ものじゃないとダメだ。持ってきてるか？」

希菜「そうですか…。持ってきてますよ。」

女子生徒達（ビ、ビックリした…。）

男子生徒達（希菜が女のカッコとかWWレアだWWWW）

※希菜と希音は違うクラスです。

『もてる理由?』

く千樹と杉助のクラス（2人は同じクラスです）く

千樹「なんで紀葉は同性にもてるんだ…。」

杉助「別にいいんじゃない?」

千樹「よくない。レズにはしたらどうすんだ。その兄ってことになるんだぞ?」

杉助「はあ…。…ん?女子が紀葉の話してるっぽいな。」

千樹「なんだと?」

く千樹と杉助から少し離れたところく

女子生徒1「千樹君の妹って超可愛いよねくVV。」

女子生徒2「分かる分かる!撫でくりまわしたいよね!」

女子生徒3「紀葉ちゃんクンカクンカしたいお!（　　）　　ω　　^　　^」

く千樹と杉助のところく

千樹「…。」

杉助「…可愛いからなのかな…。」

千樹「…希華に聞いたらカッコよくて優しいところって言ってたんだが…。」

※紀葉たちは中高一貫の学校に通っていて、みんな同じ学校です。

『ある意味守護神』

く希華のクラス（銀杏とは違うクラスです）く

希華「…。」ボケーツ

女子生徒1「あの子ちょっと紀葉さんになれなれしいと思わない？」
ヒソヒソ

女子生徒2「たしかに。紀葉さんに優しくされてるからって少し調子にのってるかもね。」ヒソヒソ

女子生徒3「制裁をくわえたほうが…!?!」

女子生徒1・2「どうし…!?!」

希音「…。」ゴゴゴゴゴゴ（戸の近くにいる）

女子生徒達（何あれ…。めっちゃ怖いんですけど…。）

希音『希華に何かしたら… コロスヨ?』(というような表情)

女子生徒達(ひいいいいっ!?)

女子生徒1「…やめところか…。」

女子生徒2「命に関わるもんね…。そのほうがいいよ…。」

女子生徒3「いかん危ない危ない危ない…。」

希音(…よし。)

『その振り方やめたげてよお!』

〈学校の裏〉

樅「…で、何の用?」

男子生徒「あの、僕、樅さんのことが好きなんです! 付き合ってください!」

樅「ハア? 何君私が千樹君と付き合ってるの知らないの? 君の何倍も素敵な人なのよ。私と付き合ってほしいって思うならもっと私のこと知っておきなさい。まあどうせ千樹君以外と付き合う気ないけどね。話それだけなら私はもう帰る。さようなら。」

男子生徒「(。D。)」

杉助「おおう……。姉ちゃん容赦ねえ……。」「（陰でみてた）

千樹「うわぁ……。」「（同じく）

紀葉「樫さん……恐ろしい人！」「（同じく）

小話集（後書き）

キャラ崩壊があった気がしたけど気にしたら負けだと思う。

ちょっと聞いてみた(前書き)

木「中1の2人が話すだけ。」

ちょっと聞いてみた

（希華のクラス前廊下）

銀杏「あのさ、希華ちゃん。ちょっと聞きたいんだけど…。」

希華「え、何？エアーマンの倒し方？」

銀杏「なんでそうなるの？馬鹿なの？死ぬの？」

希華「馬鹿って言ったほうが馬鹿なんだよ。」

銀杏「小学生かよ…。ていうかそうじゃなくてさあ。」

希華「えー…。じゃあ何？リオr」

銀杏「人の話聞けよ！なんでリオレウスの倒し方になるんだよ！つか僕ロックマンもモンハンも持ってないんだよ！ちゃんと聞けよ馬鹿！」

希華「じゃあ何のゲームなら持ってんの？」

銀杏「ゲームの話じゃないよ！…まあ一応答えとくとマリオのゲームとかかな…。」

希華「ふーん。で、何？」

銀杏「うん、あのさ。なんで希華ちゃんは紀葉さんのこと好きなの？」

希華「：言わなきゃわからない？」

銀杏「わからないよ。なんでそこまで好きなのさ？」

希華「そりゃあ：美人でカッコよくて頭も良いし：それにすごい優しいもん。好きにならないほうがおかしいって思うぐらいだよ。：なんで銀杏君は好きにならないの？」

銀杏「：僕年下が好きなんだよ。」（嘘だけど。単にタイプじゃないだけけど。でも普通に言ったら怒られそうだし：。）

希華「あ、そうなんだ。：でもなんで紀葉さんって男の人にはそんなにでもないのかな？」

銀杏「実際はもててるかもしれないけど：ほら、紀葉さんの周回っていつも女子いるじゃん。だから怖がって男子が近づいてこないんじゃないかな：。」

希華「そっかあ：やっぱり紀葉さんってすごいなあ！」

銀杏「ホント：いろんな意味でね：。」（もはや信者だなこいつ：。）

ちょっと聞いてみた(後書き)

木「銀杏の出番が少ないと思ってだした結果がこれだよ！」

※紹介には書いてないけど紀葉は勉強はできて、運動はダメダメです。

プールに行きたくない奴と行きたい奴（前書き）

木「紀葉は実はカナヅチなのです。」

プールに行きたくない奴と行きたい奴

＼学校の玄関近く（放課後）＼

希華「あ、紀葉さん。」

紀葉「おお希華。どした？」

希華「あの、今度の土曜日暇かな？」

紀葉「私？暇だけど…。」

希華「よかったら、一緒にプー」

紀葉「嫌だ。」

希華「ええっ！？そんな…！」

紀葉「プールやだ。絶対やだ。プールなんて消えればいい！」

希華「…もしかして紀葉さん…泳げないの？」

紀葉「そうだよ。」

希華「浮き輪とかは…。」

紀葉「持ってない。借りるのも金かかるし。」

希華「…そんなに行きたくないの？」

紀葉「プールなんぞに行きたい奴の気持ちかわからない。」

希華「そんな…。」

紀葉「とにかくプールには行かないから。それだけだったら帰るよ。じゃあね。」スタスタ

希華「あっ…。…うう（´；ω；ゝ）」

希音「…。」ギリギリギリギリ（陰でみてた）

希菜「落ち着け希菜…はやまるな…。」（同じく）

プールに行きたくない奴と行きたい奴（後書き）

千樹「紀葉って小さい頃から泳げないよな…。」

紀葉「プールなんてこの世から消えればいい。」

木「まだ言ってるw」

プールに行きたくない奴と行きたい奴（番外編）（前書き）

木「この2人に先に誘われてたっていう。でっていう。」

プールに行きたくない奴と行きたい奴(番外編)

〽紀葉のクラス前廊下(放課後)〽

百合「ねえ紀葉？」

紀葉「ん、何？」

百合「今度の土曜日一緒にうm」

紀葉「だが断る。」

百合「えっ!?!なんで!?!」

紀葉「海なんか行きたくない。絶対に。」スタスタ

百合「ああ、海が嫌なの…って行っちゃった…。」

〽玄関近くの廊下〽

桜太郎「おい紀葉。」

紀葉「海とかなら行かないぞ。」

桜太郎「ちげえええよ!!なんでそういうの前提だと思ってんだよ!つかおれお前が泳げないの知ってるからな!」(紀葉と同じクラスだから)

紀葉「じゃあなんだよ?」

桜太郎「今度の土曜日山で虫取り勝負だ！」

紀葉「えー…。やだ。」

桜太郎「なんだと？どこに嫌がる要素がある？」

紀葉「私だったら山に行くだけで疲れ果てちゃうよ。」

桜太郎「それだけかよ！？そんぐらい頑張れよ！」

紀葉「うっさい！無理だから言ってるんだろ！とにかく行かないからな！」スタスタ

桜太郎「あっおい！…くそう…。」

プールに行きたくない奴と行きたい奴（番外編）（後書き）

木「プールじゃないけどっていう。でっていう。」

言葉使いは気にしないもの（前書き）

木「何が書きたかったのかよくわからない産物だ。」
フヒヒ W W サーセン W W W

言葉使いは気にしないもの

～紀葉の家～

紀葉「管理人、ゲームするべ。」

木「するべするべ。」

千樹「なんだよするべって…。」

紀葉「いーじゃん別に。」

千樹「お前もうちょっと女らしい言葉使い心がけたほうがいいぞ。」

木「私は？」

千樹「お前はどうでもいい。」

木「うはW W W ヒドスW W W W W」

千樹「その喋り方うざい。」

木「(´・ω・｀)」

紀葉「あーあショボンってなっちゃったよ。謝ったほうがいいよ、お兄ちゃん。」

千樹「いやこいつが悪いよね？なんで俺が謝らないといけないの？」

木「（　；　ω　、　）」

紀葉「あーあ泣いちゃった。」

千樹「あーあー分かった。すまん。泣くな。」

木「いーよ別に…。」

紀葉「で…なんだっけ？話…。」

千樹「もうちょっと女らしい言葉使い心がけたほうがいいぞっていう話だ。」

紀葉「だが断る。」

千樹「なんでだよ!？」

紀葉「なんか弱い感じがしてやだ。」

千樹「弱い感じってお前…。」

紀葉「女が弱いっていう考え方は古いよ。」

千樹「いやでも…そうにしても女っぽくなさすぎるといいうか…。」

木「じゃあ聞くが…。」

千樹「なんだよ?」

木「女っぽい言葉使いが紀葉に似合うと思うか?」

千樹「…うん…。」

木「…似合わないって思ったろ。だから今のままでいいんだよ。」

千樹「嫁の貰い手は出てくるんだろうか…。」

木「心配することそれなのか…。」

紀葉「結婚はしたくないよ。」

千樹「!？」

木「なんで？」

紀葉「自由な時間が少なくなるもん。だからやだ。」

千樹「…すごい考え方だな…。」

木「これぞ紀葉クオリティWWW」

千樹「その喋り方うざいって言っただろ。」

木「(´・ω・｀)」

言葉使いは気にしないもの（後書き）

紀葉「あーあショボーンって（r y」

千樹「いやこいつが（r y」

無限ループって怖くね？

超鈍感中学生（前書き）

千樹「紀葉は鈍感過ぎる。」
木「そこがいいんじゃないか。」

超鈍感中学生

〽学校の廊下（休み時間）〽

希音「あ、紀葉さん…。」

紀葉「おお希音。おっす。」

希音「…紀葉さん、ちょっと聞いていいですか？」

紀葉「ん、何？」

希音「希華のこと…どう思ってますか？」

紀葉「希華？うーん、そうだねえ…。人懐っこくて優しくて良い子だと思うよ。」

希音「…希華のこと好きですか？」

紀葉「うん、好きだよ。」

希音「…本当に？」

紀葉「うん、だって友達だもん。」

希音「……。」

紀葉「え、ちょ、なんで怒ってんの？」

希音「…なんでもないですよ…。」（希華は紀葉さんのこと本当に好きなのに、紀葉さんは友達としか見てないんだ…。希華がかわいそう…。）

紀葉「…?？」

（学校の廊下（放課後））

銀杏「あ、紀葉さんだ。」

紀葉「お、銀杏。おっす。」

銀杏「そういえば紀葉さんに聞きたいことがあるんだけど…。」

紀葉「いいよ、何?」

銀杏「紀葉さんって兄ちゃんのことどう思ってるの?」

紀葉「桜太郎のこと? そうだねえ…。ちよつとがさつだけど、根はいい奴だと思うよ。」

銀杏「え、そう見えるの?」

紀葉「うん。」

銀杏（この人すげえw）「じゃあ、兄ちゃんのこと好き?」

紀葉「うん、好きだよ。」

銀杏「!？」

紀葉「友達だし。」

銀杏「あ、なんだWWW」

紀葉「…どうかした？」

銀杏「なんでもWWWないよWWW」（兄ちゃんドンマイWWW）「
…じゃあ百合さんのことどう思ってる？」

紀葉「あゝ…私百合さんのことぶっちゃけ苦手なんだよね…。変な
ところ触ってくるし、女子にも変なことしてるし、男子には暴言吐
くし…。」

銀杏「やっぱりなWWW」

紀葉「…私なんか変なこと言った？」

銀杏「ゴメンWWW気にしないでWWW」（変態女ザマァWWW）

紀葉「…?..?..?」

超鈍感中学生（後書き）

木「紀葉w気づけww」

紀葉「え、何が？」

チャット風（前書き）

チャット風に会話させてみた。
誰が誰なのか当ててみてね！

チャット風

くチャット(?) ~

葉っぱっ子…マリオについて語ろう

スギ花粉…そういえば30周年だよな

もみもみ…任天堂といえばマリオだよな

キレイハナ…マリオさんはみんなのヒーロー!

菜っ葉…マリオワールド好きだったなあ

根元から…オープニングがあなたも私もNEETにしか聞こえなくなっちゃった

ぎんなん…クソワロタWWW

単子葉類…ピーチ姫は俺の嫁

日本の花代表…でっていうはとりあえず踏み台にするよな

木っ子…ギャラクシーの音楽は神

名無し…お前らこんなことしてないで勉強しろよ

スギ花粉…じゃあおまいはなぜここにいるんだ

ぎんなん…ハイハイワロスワロス

日本の花代表…まずお前が勉強しろ

単子葉類…ぬるぽ

葉っぱっ子…ガッ

木っ子…ガッ

もももみ…ガッ

キレイハナ…ガッ

菜っ葉…ガッ

根元から…ガッ

スギ花粉…ガッ

日本の花代表…ガッ

ぎんなん…ガッ

チャット風（後書き）

答え合わせ

葉っぱ子↓紀葉

名無し↓千樹

もももみ↓椋

スギ花粉↓杉助

キレイハナ↓希華

菜っ葉↓希菜

根元から↓希音

日本の花代表↓桜太郎

ぎんなん↓銀杏

単子葉類↓百合

木っ子↓木

わかったかな？あと今回短いな…。

作者襲来（前書き）

木「まさかのあいづがやってくる！」
おいタイトルWWWW

作者襲来

「紀葉達の家」

紀葉「暇だ…。」

木「暇だのう…。」

千樹「おい紀葉、お前宿題したのか？」

紀葉「終わったから暇なんじゃん。」

木「ゲームでもするか？」

紀葉「そうだなあ…。」

千樹「ゲームしてばっかじゃねえか。」

ピンポン♪

木「ん、誰だろ？」

紀葉「私が出るよ。」トテトテ

木「ふい。」

紀葉「はいはい…。」ガチャ

作者「やあ（´・ω・｀）」

紀葉「∴。」

ガチャン

作者「ちょWW閉めんなWW」

木「誰だった？」

紀葉「作者。」

木「え、マジで？」ガチャ

作者「YO☆」

木「うわWうぜえWW」

作者「フヒヒWサーセンWW」

紀葉（こいつら似てる∴。）

木「てか何故来たし。」

作者「話をしよう。」

木「だが断る。」

作者「聞けWWW」

紀葉「立ってんの疲れるからあがれよ。」

作者「いやあゝすいませえゝんW」

千樹「!?!? お前は作者!」

作者「どうも木吉さん。」

千樹「誰だそれ。」

作者「ネタだよWW」

千樹「てか何しに来たんだ?」

作者「いや実はね…ちよつとおまいらに話したいことが…。」

紀葉「早く話せよ。」

作者「この小説の…アクセス数が伸びない…。」

紀葉「そりゃそうだろ。」

千樹「駄文だからな。」

木「文才ないもんなあ。」

作者「ああんひどうい…。」

紀葉「そもそも読んでる人いるのか?」

作者「いるにはいるよ。今600アクセスぐらい（2011年10

月8日現在)。」

千樹「充分だろ。読んでくれるだけで。」

作者「でも他の作者さんに比べて少ないと思うんだ。どうやったら人気出るのかなあと思うんだよ。」

木「お前じゃ無理。」

作者「(´・ω・｀)」

千樹「実際どう思っこの小説を読んでるんだろうな。読者は。」

紀葉「感想0だから分かんないね。」

作者「感想欲しい…評価も欲しい…。」

木「酷評でも知らんぞ。」

作者「今後に役立てるから良いよ！」

紀葉「荒らしが来たらどうすんだ？」

作者「スルーでおk。」

千樹「まあでも感想来ないだろうな。」

作者「うるせえよ。という訳で、感想などはどんどん言ってください。駄目なところもどんどん指摘してください。待ってます。」

作者襲来（後書き）

感想欲しいよお……てな訳でお願いします。
マジで。

作者の紹介と見た目（前書き）

作者の紹介とキャラの見た目のイメージをば。

作者の紹介と見た目

作者（紀葉^{のりは}）

この小説を書いている奴。高校1年生。女。

重度のニコ厨。どうしようもない。

運動全然駄目。勉強も微妙。文才もない。

好きなキャラはドンキーコング、マリオ、カービィ。

スマブラでよく使うのはカービィとオリマー。

小説にはたまに出る。

見た目のイメージ

制服は中学も高校もブレザー。

紺色のズボンと上着、白いYシャツ、ネクタイおよびリボンは、中学生は青、高校生は緑。

紀葉↓黒髪のショートヘア。

千樹↓黒髪で紀葉より少し短い髪。

柊↓栗色のウェーブがかかったロングヘア。

杉助↓栗色の天然パーマ。

希華↓褐色のポニーテール。

希菜↓褐色で低い位置で髪を1つに縛っている。

希音↓褐色でストレートのロングヘア。

桜太郎↓茶髪のツンツンヘア。

銀杏↓黒髪で外ハネヘア。

百合↓焦げ茶色のツインテール。

木↓黒髪でボサボサの髪。

作者↓ご想像にお任せします（＾p＾）

身長順

杉助<千樹<椛<桜太郎<百合<希菜<紀葉Ⅱ木<希音<希華<銀杏
作者の身長はご想像に（r y

体型は一応みんな普通です。

ブサイクも一応いない。

作者の紹介と見た目（後書き）

木「作者の見た目分かんねえw」
フヒヒwサーセンw
w

みんなの家族（前書き）

地の文をちょいちょい書くことにしました。

みんなの家族

＼紀葉達の家＼

今日は休日…。

ゆえに紀葉達は暇を持て余していた。

木「私だ。」

紀葉「お前だったのか。」

木「また騙されたな。」

紀葉「全く気づかなかった。」

木「暇を持て余した。」

紀葉「神々の。」

2人「遊び。」

千樹「…そのネタちよつと古いんじゃないか？」

紀葉「まあいいじゃん。」

千樹「というか…最初の文なんだよ?」

木「地の文ですが何か?」

千樹「今まで書いてなかっただろ。なんでいきなり…。」

紀葉「それはね、感想で地の文書けって言われたからだよ。」

千樹「…え？感想きたのか？」

木「きたんだなこれが。」

千樹「…これ夢なんじゃないのか？」

木「ところがどっこい…！夢じゃありません…！現実…これが現実…！」

ざわ…ざわ…

千樹「なん…だと…。」

紀葉「そうそう、お兄ちゃんに手紙来てるよ。」

紀葉は千樹に手紙を渡した。

千樹「手紙？どれどれ…。」

千樹は手紙を読みはじめた。

『千樹へ

感想きたぜw w wうえwうえw

こないと思っただろw w ザマアw w w m 9（＾Д＾）プギヤー

千樹は思いっきり手紙を破り捨てた。

千樹「むかつく…。」

紀葉「多分同情だと思うけどね。（この小説の）作者がお気に入り登録してた（他の）作者さんからきたし。」

木「それでもありがてえじゃないか。そんなことより今回は何する？」

千樹「いつも通りに雑談じゃないのか？」

紀葉「そういえばさあ…。」

木「どした？」

紀葉「みんなの家族構成はどんな感じなのかな…？」

木「なるほど。じゃあ紹介するか。」

千樹「え、わざわざ家まで行くのか？」

木「いや、それだと時間かかるから地の文に任せよう。」

紀葉「そりゃいいね。」

つーわけで、地の文で説明します。

八木家

八木兄妹と木の3人暮らし。

両親は海外に出張中。

3人ともわりと仲良いです。

ちなみに八木父は陽気でゲーム好き、

八木母は冷静で頭が良いんだとか。（木曰わく）

こんなもんか。

次は松田家に行きます。

～ 椀達の家～

みんなでマリオパーティ3をしているようです。

椀「スターゲット！」

松田父「ダニィ！？」

杉助「マジか！」

松田母「あらあら。」

今のところ1位が松田母、2位が椀、3位が松田父、ビリが杉助。

杉助「もう駄目だあ…おしまいだあ…！」

松田父「何を寝言言ってる！ふてくされる暇があったら戦え！」

椀「これってあれだよな。某王子とナメック星人のやりとりだよな。」

」

松田母「そういえばそうねえ。」

松田家

松田姉弟と両親の4人暮らし。
和気あいあい。

松田父は漫画オタク、

松田母はのんびり屋という感じです。

みんなの家族（後書き）

長いので続く！

次は草野家に行きます。

みんなの家族その2 (前書き)

この前の続き。

みんなの家族その2

く希華達の家く

親が帰ってきたみたいです。

草野父「ただいま。」

希華「お父さん、お帰りなさい！」

希菜「おかえり、親父。」

希音「…おかえり。」

草野父「会社からパンを分けてもらったぞ！」

希華「ホントに!?!」

希菜「おおっ、うまそう！」

希音「明日みんなで食べよう…。」

草野家

草野三姉妹と父親の4人暮らし。

母親は昔事故死してしまったらしい。

あまり裕福ではないが、みんなで支え合って生活している。絆は強い。

草野父は娘達をすごく大切にしている。パン会社勤務。

草野母は優しく、強い人だったらしい。

次は梅山家。

「桜太郎達の家」

なにやらもめているようです。

銀杏「兄ちゃん！僕のプリン食べたの兄ちゃんだろ！」

桜太郎「ハア！？おれじゃねえよ！親父じゃねえのか？」

梅山父「残念、俺ではない。」

銀杏「となると…。」

梅山母「アタシだよ！」

銀杏「母ちゃんんんん！」

梅山母「なかなかうまくいったよ、あのプリン。どこで売ってたんだい？」

桜太郎「確かコンビニじゃなかったか？」

銀杏「…うん。」

梅山父「いつでも食べられるものではないか。そこまで落ち込むことではないだろう。」

梅山母「今度また食べるか。」

銀杏「僕にも食べさせてよ！」

梅山家

梅山兄弟と両親の4人暮らし。

ケンカもあるけど基本的にはやっぱり仲良し家族です。

梅山父は漢という言葉が似合う人、

梅山母は元ヤンです。

最後は椿家です。

（百合の家）

百合が何かしているようです。

百合「…。」モミモミ

なんと！メイドの胸を堂々と揉んでいる！

メイド「お嬢様、まだ気が済まないのですか？」

百合「まだよ。あたしがいいって言うまで揉まれなさい。」

メイド（こんなことなら男に生まれたかった…。）

その陰で…。

椿母「あの子ったらまたメイドにセクハラして…！」

椿父「せ、性欲を、持て余しているみたいなんだな。」

椿母「これも全部あんたのせいよ！」

椿父「なんで!？」

椿母「あんたがキモいからあの子がレズになっちゃったんじゃない!」

椿父「(・ω・)」

椿家

家族は百合と両親の3人。

他にメイドがたくさん。

他の家族に比べるとあんまり仲良くない。

椿母は苦勞性でちよいS。もともと金持ちだったのはこっち。

椿父はキモい。百合が生まれるまではそうでもなかったらしい。

メイド達はぶっちゃけキモい椿父とセクハラしてくる百合に嫌気がさしている。

みんなの家族その2（後書き）

家族もわりとカオスにしてみた。
地の文あんまり入ってこないな…。

鼻たれ小娘紀葉ちゃん（前書き）

執筆当時、作者も風邪でした。

鼻たれ小娘紀葉ちゃん

〽紀葉のクラス〽

休み時間中…

紀葉「ぶえっくし！」

紀葉が女の子らしくなくしゃみをした。
するとすぐに女子生徒2人が寄ってきた。

女子生徒1「大丈夫ですか紀葉さん！」

女子生徒2「ティッシュ持ってきましたああああ！！！」

そういつて、箱ティッシュを紀葉の前に出したが、しかし。

紀葉「大丈夫だよ…ティッシュあるから…。」

女子生徒1「(´・ω・、)」

女子生徒2「orz」

こんなやりとりを、たまたま教室の前を通りかかった千樹と杉助が聞いていた。

千樹「…ん？」

杉助「どした千樹？」

千樹「いや…あいつティッシュ持っていったっけって思って…。」

杉助「記憶違いじゃね？」

千樹「うーん…。」

そんなこんなで放課後。

（廊下）

紀葉「スーパーマリオ〜オールピージー♪」

紀葉が『森のキノコにご用心』を歌いながら玄関に向かっていくと、

柗「あ、紀葉ちゃんだ。」

千樹「あ。」

千樹と柗に会った。

紀葉「お、柗さんとお兄ちゃん。…あれ？杉助は？」

柗「杉助なら部活（サッカー部）だよ。」

紀葉「あ、そっか。」

千樹「そういえば紀葉。」

紀葉「なに？」

千樹「休み時間にお前のクラスの前通りかかったんだが…。」

紀葉「うん。それで？」

千樹「お前…ティッシュ持ってきてたのか？」

紀葉「ああ、あれ家のティッシュじゃないよ。」

千樹「えっ。」

柊「ティッシュ？紀葉ちゃんにかしたの？」

紀葉「ええまあ…鼻水がでるんですよ。」

柊「風邪？なのにティッシュ持っていかなかったの？」

紀葉「忘れてたんですよ…。」

千樹「というか…家のじゃないってことは誰かからもらったのか？」

紀葉「実はね…。」

回想開始。

（校門）

紀葉が登校してきたとき…。

紀葉「あ、桜太郎。」

桜太郎に会った。

桜太郎「あ？なんだ紀葉か。」

紀葉「なんだってなんぶえつくしよーい！！」

桜太郎「おおう！？」

やっぱり女の子らしくないくしゃみをした。

紀葉「うゝ…。」

紀葉は鼻水をたらしている。

桜太郎「おい鼻かめよ…。」

紀葉「…ティッシュ持ってない…。」

桜太郎「ハア？なんだよしょーがねーなあ…。これ持ってけよ。」

そういつて、ポケットティッシュを紀葉にあげた。

紀葉「あ…ありがとう…。助かる…。」

桜太郎「ゝっ／＼／＼今度は自分で持ってこいよ！」

紀葉「ハイハイ…。」

）廊下（

回想終了。

紀葉「…というわけで。」

千樹「…。」

柊「…。」

紀葉「…？なんで2人とも黙ってんの？」

千樹（まさか…あの男…いや深く考えすぎか？いやしかし…。）ド
ドドドドド

柊（これはもしかしたら…うふふふふ…。）ニヤニヤ

紀葉「…？？」

鼻たれ小娘紀葉ちゃん（後書き）

翌日の校門にて。

紀葉「ぶあつくしーいー!!」

希華「き、紀葉さん!大丈夫!」

紀葉「:あ、やべえティツシュない:。」

希華「ティツシュあるよ!ほら!」

紀葉「ありがとう:。」

希華「う、うん:／／」

百合「きよおおお!」

紀葉と希華「!」

百合「ティツシュならここにあるわ!さあ!」
(ざっと見100個
を手に抱えている。)

紀葉「そんなにいらな:。」

百合「:。」

希華「wwww」

ハロウィン小ネタ（前書き）

ハロウィンでの対応って相手によって変わるよね。

※後半2つはifです。

ハロウィン小ネタ

ケース1…通常の場合

紀葉「桜太郎、桜太郎。」

桜太郎「なんだよ？」

紀葉「トリックオアトリート！」

紀葉はまぶしい笑顔を見せた！

桜太郎「っ!？」

桜太郎はたじろいでいる！

紀葉「お菓子くれ! お菓子!」

桜太郎「う…も…持ってない…。」

紀葉「持ってないのか…じゃあイタズラだ!」

桜太郎「い…いたずら?」

すると、紀葉はどこからか油性ペンを取り出した。

桜太郎「!?!? な、なにをするだあーっ!?!?」

数秒後…

桜太郎「∴。」

桜太郎の額には『肉』の字が書かれていた。

紀葉「w w w w w」

ケース2…紀葉が桜太郎のことを嫌いだったら（桜太郎の完全一方通行）

紀葉「トリックオアトリート。」

冷めた顔で言った。

桜太郎「うぐう…持ってねえよ∴。」

紀葉「おらあ！」

ボガッ！

桜太郎「そげぶっ!？」

桜太郎は紀葉に思いっきり殴られた！

桜太郎「う…ぐぬう∴。」

紀葉「実につまらない。」

ケース3…紀葉が桜太郎のことを好きだったら（桜太郎と両思い）

紀葉「トリックオアトリート♪」

桜太郎（う…可愛い…。）「持っていないぞ…。」

紀葉「そうなの？じゃあちよっと目をつぶって。」

桜太郎「？」

桜太郎は目を閉じた。
すると！

チュッ

桜太郎「!？」

キスしてきた。

紀葉「これでいいや♪」

桜太郎「…。」

桜太郎フリーズ。

ハロウィン小ネタ（後書き）

基本的に桜太郎×紀葉ひいきです。
百合と希華「!？」」

王様ゲーム！(前書き)

1回やってみたかったんだよ。

王様ゲーム！

〽紀葉達の家〽

木「王様ゲーム、やらないか」

紀葉「いきなりなんだよ？」

木「ただしくは作者が王様ゲームのネタを書きたいわけなんだが。」

千樹「馬鹿馬鹿しい。やってらんねえよ。」

木「千樹の宿題破り捨ててくるか。」

千樹「すみませんやりますので勘弁してください。」

木「いいんだよそれで。」

というわけで全員集合。

木「王様ゲームのルールは分かるよね？」

全員「ok。」

木「じゃあ引くぞー。」

王様だーれだ？

杉助「あ、オレだ。」

柊「命令は？」

杉助「じゃあ6番がルシフェルの物真似。」

銀杏「僕か…。」

杉助「じゃあやってくれ！」

銀杏「…話をしよう。あれは今から36万年前、いや…1万6000年前だったか…。まあいい。あいつには2通りの呼び方があって…最初に会ったときは確か…イーノック。」

希華「すごい！」

希菜「歪みねえな…。」

千樹「…さっきのって似てたのか？」

紀葉「似てたよ。」

木「ハイハイ次いくぞー。次ー。」

王様だーれだ？

百合「ふっ、あたしの時代がきたようね！」

桜太郎「なにっ!？」

百合「2番はあたしに奉仕しなさい！」

百合以外「奉仕!?!」

桜太郎「…かわいそうな2番の奴は誰だ?」

希音「…。」

希音が黙って手をあげた。

百合「希音ちゃんね?じゃあさっそく…。」

希音「安らかな眠りにつかせてあげますよ。」

希音はどこからか鉈を取り出した!

百合「!?!」

希音と百合以外「ストロープ!!」

結局命令はなかったことに。

希菜「超いやだったんだな…。」

希音「…。」コクリ

百合「どうしてこうなった…。」

桜太郎「日頃の行いが悪いからだろ。」

百合「なによそれ!」

桜太郎「そのままの意味だ。」

木「ケンカしてないで仕切り直しー。」

王様だーれだ？

紀葉「あ、私だ。」

希華「御命令どうぞ！」

紀葉「5番が好きな人に告白。」

紀葉以外「!?!」

いっせいに番号確認。

桜太郎（よかった…おれじゃなくて…。）

希華（ビビルワァ!）

百合（チッ、あたしじゃないのか…。）

紀葉「5番ダレー？」

柊「私っ！」

千樹「!?!」

紀葉「k t k r w wじゃあどうぞw wフヒヒw w w」

柊「千樹君。」

千樹「ハッ、ハイ！」

柊「私…千樹君のことが好き！」

杉助「おふうwおふうw」

千樹「お、俺も…。」

希華「お？」

千樹「俺も柊さんのことが好きです！」

千樹と柊以外「おおー！」

柊「千樹君…。」

千樹「柊さん…。」

希菜「…なんか2人の世界だな。」

希音「確かに…。」

桜太郎（うらやましい…。）

希華（いいなあ…。）

百合（妬ましい…パルパル。）

銀杏（あの3人すごいうらやましそうに見てる…。）

杉助「良いもん見たw」

紀葉「ホントですなあww」

木「こんなときに言うのもなんだが、あと1回で終わりな。」

木以外「!？」

木「さあラストだ！」

王様だーれだ？

木「とここで私のターン！」

千樹「お前かよっ！」

木「1番が10番にキスで。」

柊「王道k t k r」

銀杏「で、1番と10番ダレ？」

紀葉「1番私！」

希華と百合「!？」

桜太郎「おれが10番…だと…!？」

希華と百合「!?!?」

木「あー紀葉。」

紀葉「ん？」

木「キスするところでもいいからね。」

紀葉「そうか。んじゃ桜太郎。」

桜太郎「え、ちょ、待て…。」

チュッ

紀葉は桜太郎の額にキスした。

紀葉「これでいいんだろ？」

平然としている紀葉に対し、

桜太郎「…。」

桜太郎は顔がかなり赤くなっている。

希華と百合「…。」

希華と百合は顔が青ざめている。

木「うはwwおkwww」

銀杏（やったね兄ちゃん！）

椛「ウブだねえ…。」ニヤニヤ

千樹「え？あ、そうですね…。」（やっぱり怪しい…。）

杉助「あの2人ってもしかして…。」

希菜「あ？」

希音「何ですか？」

杉助「…なんでもない。」（こいつらの顔が怖い…。）

紀葉「もう終わりだろ？」

木「うむ。これにて終了！おつかれ！」

王様ゲーツム！（後書き）

結構長くなった…。

希華「ひどいよ作者…。」

百合「殺すぞ作者…。」

文句言うな。

ショッピング的な何か（前書き）

木「ペロツ…これは青酸カリ！」

紀葉「バーローwww」

※本文とは関係ありません。

ショッピング的な何か

くどっかの駅く

今日は女子メンバーが集まってショッピングに行くようです。(希菜含む)

柊「みんな集まった？」

紀葉「来てますよー。」

希華「はーい！」

百合「ウフフ♪」

希菜「なんで俺まで…。」

希音「たまにはいいでしょ。」

柊「それじゃあ行きましょ！」

てなわけで出発。

柊「どこ行こっか？」

希華「服とか見ましょよ！」

紀葉と希菜「え…。」

希音「∴希菜は分かるけどなんで紀葉さんまで∴。」

紀葉「見るとこないじゃん。つまんないよ。」

紀葉と希菜以外（女子の言葉じゃねえ∴。）

百合「でも紀葉に似合う可愛い服があるかもしれないじゃない！コーディネートしてあげるわよ∴ハアハア∴。」

紀葉「∴。」（ドン引き。）

希菜「服見るんだったら俺と紀葉さん外で待ってるんで。」

希音「でも寒いよ∴。」

希華「中で待ってたら？」

紀葉「じゃあそうする。」

百合「紀葉、服は∴。」

紀葉「見ない。」

百合「仕方ないね。」

（服屋）

さっそく見て回る4人。

柊「ねえねえ、これ希音ちゃんに似合うんじゃない？」

希華「あ、可愛いですねこれ。絶対希音似合うよ!」

希音「でもちょっと大きいですよ…。」

百合（ママに何か買って行こうかな…。）

待ってる2人というと。

紀葉「…。」カチャカチャ

希菜「あの…何やってるんですか?」

紀葉「スーパーマリオ3Dランド。」

希菜「はあ…。」

買い物終了。

柊「お待たせ!。」

希菜「長かったですね…。」

希華「そうかな?」

希菜「てか希華と希菜、結局買ってねえじゃないか。」

希華「お金のことを考えると買えなかった。」

希音「同じく。」

紀葉「百合さんは買いすぎだよ…。」

百合「まあね。」（デカイ手提げ袋が2つ。）

柗「じゃあ次は…。」

ぐぎゅるるる

柗「?。」

希音「お腹すきました…。」

柗「ファミレスでも行く?。」

紀葉「k t k r!。」

希菜「よっしゃ!。」

希華「喜びすぎだよw」

移動。

ゝファミレスゝ

女店員「いらっしやいませゝ。何名様ですか?。」

柗「6人です。」

女店員「じゃあこちらへどうぞ。」

テーブル席に座る6人。

百合（さっきの店員さん美人だったな。）

そこで、適当にご飯を食べました。

紀葉「省略すんなw」

フヒヒwwサーセンwwby作者

柊「行きたいところある人ー。」

紀葉「はいっ！」

柊「はい紀葉ちゃん。」

紀葉「ゲーセンがいいです！」

希菜「賛成！」

柊「他のみんなは？」

希華「紀葉さんが言うなら…。」

百合「紀葉が言うなら…。」

希音「私は別にどこでも…。」

柊「…じゃあ行こっか。」

くゲーセンく

希華「紀葉さん、一緒に太鼓の達人やろうよ。」

紀葉「おっ、いいよ。」

百合「先こされた！」

希菜「ポップンミュージックやるか。」

希音「じゃあそれ見てる。」

柊「みんなプリクラは撮らないんだね…。」

太鼓の達人をやる紀葉達は…

紀葉「難易度は…。」

希華「紀葉さんが決めていいよ！」

紀葉「じゃあ鬼。」

希華「!?!」

紀葉「曲は？」

希華「きょ…曲も決めていいよ…。」

紀葉「じゃあきたさいたま2000。」

希華「おおふ。」

プレイ中…

希華（譜面が…見えない…。）

紀葉「〜♪」

終了。

希華「マジ無理…。」

紀葉「修行が足りないね。次は紅やるよー。」

希華「紀葉さんマジパネェス…。」

ポップンミュージックをやってる希菜は…

希菜「…。」ズダダダ

希音（無言なうえに無表情…怖い…。）

パーフェクトですた。

百合と椀はというと…

ボトツ

百合「あぁっ！落ちた！」

柊「だらしねえし…。」

UFOキャッチャーやってみました。
それぞれ楽しんだあと…。

柊「そろそろ帰ろうか？」

紀葉「そうですね。」

というわけでみんな帰路につきましたとき。

ショッピング的な何か（後書き）

紀葉「ggdggd感が否めない…。」
ごめんなさい。

バンバンバンバン♪(前書き)

木「もっと熱くなれよおおお!!」
※本文とはあまり関係ありません。

バンバンバンバン♪

「桜太郎達の家」

夜。

それは1日の終わりの時間。
生き物は静まり返り、
体を休ませる。

人間もまた、例外でh

梅山母「ぬああああ！」

…あるえ？

梅山父「どうした、そんな大声出して。」

梅山母「風呂壊れた…。」

銀杏「ナ、ナンダッテー！？」

桜太郎「てか壊れたって…？」

梅山母「お湯が沸かせないんだよ。」

銀杏「銭湯行く？」

梅山父「今日は休業日のはずだ。」

桜太郎「じゃあどうすんだ？」

梅山母「椿さんちに風呂入りに行くか。」

桜太郎「…。」

梅山父「うむ、そうだな。」

銀杏「仕方ないね。」

桜太郎「おれパス。」

梅山母「臭くなるよ!」

桜太郎「あいつんちとか考えただけで吐き気する…。」

銀杏「じゃあ紀葉さんち行けば?」

桜太郎「!?!」

梅山父「うむ、そんなにいやならば他の家に行くしかあるまい。」

梅山母「あんたそうしなよ。桜太郎。」

「紀葉達の家」

桜太郎「というわけだ。」

桜太郎は八木家にお邪魔していた。

紀葉「要するに風呂に入りたいんだよな。」

桜太郎「ああ。」

木「私たちはもう入ったから。入っておいで。」

桜太郎「おう。」

入浴中…

紀葉「湯加減どうだ？」

桜太郎「まあまあだな。」

紀葉「背中流してやろうか？」

桜太郎「!？」

紀葉「冗談だよw」

入浴終了。

紀葉「また入りに来いよ。」

桜太郎「いや、もう来ない。」

紀葉「来いよ！」

桜太郎「だが断る！」

千樹「早く帰れ…。」

木
「
う
え
w
w
」

バンバンバンバン♪(後書き)

山落ち意味などないわ。

百合と桜太郎（前書き）

紀葉「百合さんってどんな人？」

桜太郎「よしわかった。説明しよう。」

百合と桜太郎

〽幼稚園〽

2人が出会ったのは幼稚園のころ。

桜太郎「これはおれのスコップだ！よこせ！」

幼稚園生（女）「うわーん！桜太郎くんがスコップとったー！」

先生「こら、桜太郎k」

百合「どりゃああああ！」

ドゴォッ！

桜太郎「あべしっ！」

先生「！？」

他の幼稚園生「！？」

桜太郎がドロップキックをくらった。

桜太郎「なにすんだてめー！」

百合「おんなのこをいじめるやつはあたしがゆるさん！」

桜太郎「やんのかこらあ！」

百合「かくごしろよ…このくそやろう！」

先生（何この子達怖い…。）

〽小学校〽

小学校時代は…。

百合「（ノ＞A＜）ノエーイ」

ペロッ

女子生徒「キャアアアア！！」

男子生徒「うわーあいつ女子なのに女子のスカートめくってんだけ
どどう思う桜太郎？」

桜太郎「あいつはただの変態だ。」

百合「あぁん！？なんか言ったか桜太郎！」

桜太郎「うるせえ黙れバカ。」

百合「バカって言ったほうがバカなんですー！」

桜太郎「マジで黙れよこの糞が。」

男子生徒「お前ら仲悪いなー。」

（中学校）

そして現在。

紀葉「…へえ、幼稚園からの付き合いなのか。結構長いんだな。」

桜太郎「あいつは筋金入りの変態なんだよ。」

紀葉「うーん、でも嫌よ嫌よも好きのうちとか…。」

桜太郎「馬鹿言うな、吐き気がする。」

紀葉「そんなに嫌いなのか…でも百合さんにも長所の一つぐらい…。」

桜太郎「無いな。」

紀葉「えっ？」

桜太郎「まずあいつは馬鹿だ。小学校のテストの最高点が45点だぞ？」

紀葉「!？」

桜太郎「それに運動も出来ないしな。小学校の記録だが、50m走るのに13秒かかる。」

紀葉「おお…。」

桜太郎「料理も出来ない。調理実習であいつの班は必ずこれはひと

いという状態になる。」

紀葉「…。」

桜太郎「歌も下手くそだ。合唱コンクールでひどいことになってたぜ。」

紀葉「そうなんだ…。」

桜太郎「男には暴言を吐き、女にはセクハラをする。ほら、長所なんて無いだろ。」

紀葉「でも百合さんってさあ…。」

桜太郎「？」

紀葉「金持ちだよな。」

桜太郎「…そこは長所として考えないほうがいいだろ…。」

紀葉「あと髪サラサラしてる。」

桜太郎「なんでわかるんだ。」

紀葉「触らせてもらったことある。」

桜太郎「…おま…ハッ!？」

紀葉の後ろに百合が立っている。

紀葉「百合さん！？いつのまに！？」

百合「桜太郎…さっきから聞いてりゃこの野郎…。」

桜太郎「なんだよ…全部本当のことだろうが！」

百合「絶対にゆるさんぞ！この虫けらがあああ！じわじわとなぶり殺しにしてくれる！」

桜太郎「やれるもんならやってみろゴルアアア！」

紀葉「どうしてこうなった…。」

百合と桜太郎（後書き）

要するに百合と桜太郎は糞がつくほど仲が悪いです。

適当な小ネタ（前書き）

ホンマ適当やでえ…。

適当な小ネタ

『多分トラウマがある』

紀葉「お肉はウエルダンじゃないとやだなあ…。」

千樹「なんでだよ？ミディアムでも美味しいぞ。」

紀葉「生焼けて…腹壊しそうじゃない？」

千樹「…！？」

『百合の特殊能力』

百合「希菜ちゃん、あなた女の子なんだからもっと可愛い格好しなさいよ。」

希菜「ちゃん付けするな！あと俺は男だって言ってるだろ！」

百合「フツ…あたしはね、人を見ただけでその人の性別がわかるのよ！」

希菜「な、なんだってー！？」

百合「だから男ぶっても無駄なのよ…うふふふ…。」

希菜「なんなんだ…この気持ち悪さは…。」

『作者はドンキー好きです』

紀葉「ねえ、希華。」

希華「え、何？」

紀葉「希華の髪型ってディクシーみたいだね。」

希華「!？」

紀葉「頑張れば飛べるんじゃないかな？」

希華「いや…無理だよ…。」

紀葉「ディディーっぽいのは誰かな？」

希華「話聞してる？」

『作者はドンキー好きです2』

紀葉「ねえ、百合さん。」

百合「あら、何かしら？」

紀葉「百合さんの髪型ってタイニーみたいだね。」

百合「!？」

紀葉「飛べそうだね。」

百合「そ、そうかしら？」

紀葉「数年したらナイスバディになってるんじゃないかな？」

百合「（。▽。）！」

『超鈍感中学生リターンズ』

桜太郎「おい紀葉。」

紀葉「何？」

桜太郎「お前好きな奴っているのか？」

紀葉「いないけど…お前はどうかんだよ？」

桜太郎「！？オ、オレは…。」

紀葉「その反応はいるんだな？教えろ！」

桜太郎「い、いねえよ！断じていない！」

紀葉「…ケチ。」

桜太郎「うるせえよ馬鹿…。」

銀杏（兄ちゃん…なぜそこでお前だって言わないんだ…。）

適当な小ネタ（後書き）

木「オトートノカタキヲトルノデス！」

桜太郎「!？」

銀杏「!？」

ここも適当っていう。でっていう。

チャーハン作るよ！
(前書き)

ヒント…ラリアット

チャーハン作るよ!

「紀葉達の家」

紀葉「最近寒いな…。」

木「もう冬だな。」

千樹「もう少しで12月だしな。」

木「昼飯何がいい? ラーメンにするか?」

紀葉「あのさあ。」

木「なんすか?」

紀葉「チャーハン作りたい。」

千樹「…なんでだよ。」

紀葉「某動画に影響されて…。」

木「なるほど…じゃあみんなでチャーハン作るよ!」

紀葉「おおー!」

千樹「俺もかよ…。」

料理開始。

木「ご飯は冷凍した奴使うから：材料を切るナリー！」

紀葉「任せろー！」

千樹「！？ちよつと待て！」

紀葉「包丁ぐらい使えるよ！」

そう言つて紀葉はネギを切り始めた。

ザクザクザクザク

ザクウツ！

木「あ。」

千樹「あ。」

紀葉「いだああああっ！？」

案の定指切った。

紹介には書いてないが、紀葉は包丁の扱いがおそろしくへたくそなのである。

紀葉「指があ！指がああああ！」

木「絆創膏あるよ。」 つ絆創膏

紀葉「あー…痛いいいい！」

千樹「落ち着け。俺が材料を切る。」

木「頼んだ!」

千樹はネギとかその他もろもろを切った。

千樹「じゃあ炒めるか。」

木「ミスるなよ!絶対ミスるなよ!」

千樹「わかってる。」

千樹は材料を炒め始めた。

木「はあ…紀葉大丈夫か?」

紀葉「結局私何もしてない…。」

木「大丈夫だあ。」

数分後…。

木「…千樹マダー?」

千樹「一応できたんだが…。」

紀葉「どれどれ…!?!?」

皿の上には、チャーハンというより焦げた飯と言ったほうが正しい

ような物体が盛られていた。

紹介（ry千樹は火の扱いがおそろしくへたくそなのである。

木「どうしてこうなった…。」

千樹「それよりこれどうする？ 食えないだろ。」

紀葉「作者に食わせておこう。」

木「把握。」

千樹「で…俺達は？」

木「…ラーメン食べに行くか。」

紀葉「ok。」

結局ラーメン屋でラーメン食べました。

チャーハン作るよ！（後書き）

チャーハンは作者がおいしくいただきました。
チャーハンちようめえ
W
W
W

逃走中反省会（前書き）

詳しくは竜斗さんの作品をご覧ください。

逃走中反省会

（居酒屋）
（いぼりや）

紀葉「作者、逃走中乙ー。」

木「乙でーす。」

作者「あざーす。」

千樹「ちよつと待て、勝手に話を進めるんじゃない。」

木「なんだ知らないのか？作者が竜斗さんのところで逃走中に出させてもらったんだよ。」

千樹「作者がか？じゃあその反省会ってことか、今日は。」

紀葉「そうだよ。」

千樹「…俺要るか？」

作者「一応。」

千樹「…。」

紀葉「しっかし作者頑張ってたよな…もう少しだったのに…。」

作者「ホントだよ…逃げ切れるかもって思ってみWなWぎWっWてWたのに…。」

千樹「え？そんなギリギリまで残ってたのか？」

紀葉「残り60分で捕まった。」

千樹「：そんなにギリギリでもないと思うが：。」

木「でも全部で700分あったんだぞ？」

千樹「長っ!？」

紀葉「でしょ？だから作者は参加者の中でもかなり頑張ったほうだよ。」

木「1回捕まって復活とかそういうこともなしにぶっ続けて逃げてたしな。」

作者「途中で休憩タイムはあったけどな！」

何故かどや顔する作者。

千樹「：ずっと隠れてたとかじゃ：。」

紀葉「いや、ちゃんとミッションも行ってたよ。」

木「全部じゃないけどな。」

作者「全部じゃなくてサーセンWWW」

木「許せる!」

紀葉「少なくとも全然行っていない奴よりマシだもんな。」

作者「ですよねwwヴィータとか氏ねって思ったわww」

紀葉「作者もボコボコタイムに参加してたよな。」

作者「フルボッコにしてやったぜ☆」

千樹「：ヴィータって誰だ？」

木「リリカルなのはに出てくるキャラだよ。」

千樹「なるほど、分らん。」

作者「そういえばドンキーに何回も助けられたなあ…。」

紀葉「そういやそうだな。捕まりそうになったときとか…。」

木「ドンキーも頑張ってたよな。作者よりは早く捕まったけど…。」

作者「ますますドンキーが好きになったぜ…うふふv」

千樹「なんでそんなにドンキーが好きなんだ？ただのゴリラだろ。」

作者「おい、表出ろ。」

千樹「うええ!？」

紀葉「お兄ちゃん、作者にドンキーはただのゴリラってのは禁句だ

よ。」

作者「ドンキーなめんな。」

千樹「サーセン…。」

木「話ずれるけどさあ。」

紀葉「んあ？」

木「作者ゲーム買ったろ。ドンキーのレースのやつ。」

作者「そう！『ドンキーコングタルジェットレース』！テラおもしろいww」

紀葉「リターンズじゃないのか…。」

作者「リターンズはムズいって聞いたから。あとタルジェットには嫁2人も出てるしな！」

木「ランキーとタイニーのことか。」

作者「その通り！俺の嫁！」

紀葉「ドンキーは？」

作者「嫁を超越した何か。」

千樹「だからなんでそんなにドンキーが好きなんだ？ドンキーはただのg」

作者「おらあっ！」

ドゴォッ！！

千樹「ぐはぁ！？」

作者のボディブローが千樹にヒット！！

千樹「何故なぐ…る…。」ガクッ

作者「てめーは俺を怒らせた…。」

木「千樹気絶しちゃったし帰るか？」

紀葉「うん。」

作者「ok。」

反省会終了。（千樹は木が引きずっていきました。）

逃走中反省会（後書き）

ランキーとタイニーは俺の嫁ええええ！！
紀葉「これホントに反省会か？」

お願い！紀葉ちゃん（前書き）

マイメロディよりキティちゃんのほうが好きです。

お願い！紀葉ちゃん

（紀葉達の家）

木「なんか作者が企画を考えたらしいが…。」

紀葉「企画？なんだよ？」

木「みんなのお願いを聞く、名付けて『お願い！紀葉ちゃん』…だそうだ。」

紀葉「なんだそのだせえ名前。」

木「企画にはツツコまないのか？」

紀葉「企画自体は結構面白そう。」

木「そうかな…じゃあ私のお願い聞いてくれる？」

紀葉「なんですかい？」

木「何かしらお菓子買ってきて。」

紀葉「わかった。」

紀葉はコンビニに行った。
数分後帰ってきた。

紀葉「買ってきたぞ。」

木「…紀葉ホントパイの実好きだなww」

紀葉「フヒヒwwサーセンww」

ここからはみんながどういうお願いをしたか見ていきます。

千樹の場合。

千樹「そんな企画やってるのか…。」

紀葉「うん。何かお願いある？」

千樹「じゃあ勉強k y」

紀葉「だが断る。」

千樹「まだ全部言っていないだろ！」

紀葉「どうせ勉強しろって言うんでしょ？やだよ。他にないの？」

千樹「ねーよ。」

紀葉「じゃあ他のところ行く。」

千樹「…。」

柊の場合。

柊「そんなことやってるの？えらいね！」

紀葉「あざーす。何かお願いありますか？」

柊「えっと…じゃあこれを千樹君に届けてくれる？」

紀葉「はい。」

数分後。

紀葉「届けてきましたー。」

柊「ありがとう♪」

杉助の場合。

杉助「そんなことやってんのか。」

紀葉「そうだよ。」

杉助「じゃあサッカーしよぜ！」

紀葉「（ハ、ハ）」

杉助「…サッカーのゲームにするか？」

紀葉「k t k r！」

数分後。

紀葉「負けた…。」

杉助「まだまだだな。」

希華の場合。

希華「普通そういうことは作者さんがやるんじゃないのかな…。」

紀葉「別にいいよ。で、お願いは？」

希華「え！？えっと…その…。」

紀葉「？」

希華「とっ、特にないよ！」

紀葉「そうなの？じゃあ次行くね。」

希華「う、うん…。」（言えなかった…。）

希菜の場合。

希菜「なんじゃそりゃ…。」

紀葉「なんかない？」

希菜「んーと…じゃあ…t」

紀葉「ダメだっ！！」

希菜「ナズエナナンダ！！オンドウルルラギッタンスカー！！！」

紀葉「ホントに男になったらキャラが成り立たないじゃないか！」

希菜「ウソダンドコドーン!!」

希音の場合。

希音「作者さんも変なこと考えるんですね…。」

紀葉「作者だもん。で、何かある？」

希音「じゃあ…百合さんをこr」

紀葉「ダメだよっ!？」

希音「えー…じゃあ…無いです…。」

紀葉「希音…恐ろしい子…!」

桜太郎と銀杏の場合。

桜太郎「なんでお前そんなことやってんだよ…。」

紀葉「なんか面白そうだったし。」

銀杏「マジっすか？」

紀葉「マジです。なんかある？」

桜太郎「特にねーよ。」

紀葉「そうなの？」

銀杏「えー…付き合ってくれとか言えばいいじゃん。」（小声）

桜太郎「馬鹿かお前!？」（小声）

紀葉「銀杏は？無いの？」

銀杏「じゃあさ、じゃあさ、兄ちゃんとも」

桜太郎「やめろおおお!!！」

紀葉「!？」

百合の場合。

…は無いです。

百合「なんでよ!？」

お前どうせ変態なこと頼むだろ！
だからあらかじめ紀葉に百合のところには行くなって言っただけなの
さ！

百合「もう終わりだあ！」

出ていけえ！

お願い！紀葉ちゃん（後書き）

お願いあんまり叶えてねえ
W
W
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6514v/>

普通で普通じゃない日常

2011年12月2日20時46分発行